

第二言語教育と非流暢性：日本語会話教育への応用 を視野に

郭, 躋
(中国) 贛南師範大学外国語学院：専任講師

<https://hdl.handle.net/2324/7392990>

出版情報：総合文化学論輯. 23, pp.1-14, 2025-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



第二言語教育と非流暢性

－日本語会話教育への応用を視野に－

郭 躋

本稿の目的は、日本語会話教育において、非流暢性をどのように取り入れていくべきかを探求することである。従来の研究では「非流暢性」は消極的に定義されることが多かったが、本稿では「発話・会話の進行性の滞り」として積極的に定義する。その上で、非流暢性が会話という相互行為において果たすコミュニケーション機能を「感情・態度の表出」、「ポライトネス・ストラテジー」、「修復ストラテジー」の三つに分類し、それぞれを概観する。また、これらを踏まえ、第二言語教育、特に日本語会話教育という枠組みの中で、非流暢性を導入する必要性及び留意点を検討する。さまざまな形態や機能を有する非流暢性のうち、通言語的で、韻律的な (prosodic) ものよりも、個別言語的で、言語的な (linguistic) もの、かつ修復ストラテジーとして機能するもののほうを優先的に扱うべきだということ、および、実際に導入する際、紙媒体より、音声媒体を用い、学習者の耳に直接訴えかけるほうが効果的ではないかという指摘を行う。

キーワード：非流暢性、進行性の滞り、コミュニケーション機能、日本語会話教育

1. はじめに

本稿の目的は、日本語教育分野の会話教育において、非流暢性の導入について考察することである。そのために、まず、議論の対象である「非流暢性」の明確化を試みる。具体的には、「発話・会話の進行性の滞り」という観点から、その積極的な (positive) 定義を検討する。また、非流暢性が会話という相互行為において果たすコミュニケーション機能を「感情・態度の表出」、「ポライトネス・ストラテジー」、「修復ストラテジー」の三つに分類する。これらを踏まえた上で、日本語教育の現場に、非流暢性の「なに」を「どう」導入していくべきかについて明らかにしていきたい。

伝統的な言語学の研究において、その基盤に「理想的話者・聴者 (ideal speaker-listener)」(Chomsky, 1965) という考え方が据えられていると考えられる。つまり、「その言語について完璧な知識を持っており (who knows its language perfectly)」、実際の運用においても「記憶の制約 (memory limitations)」、「注意が逸れたり、興味関心が移ったり (shifts of attention and interest)」すること、また、誤用 (errors) などが一切ない完璧

な話者・聴者のみを対象として扱ってきた。

だが、現実世界では、「理想的話者・聴者」はまず存在しない。母語話者による実際の音声言語（事前に準備した文章の暗誦や原稿の読み上げを除く）をすこしでも眺めてみると、以下の事例で示されているように、Chomsky が想定する「理想的話者」では考えられない言語運用上の「乱れ」（次の事例（1）では網掛け部分）が随所に現れていることに気が付く。（本稿の以下の部分で、事例（1）のように、実際の発話データを書き起こしたものを事例として適宜示すが、データを書き起こしは、Jefferson(2004)によって開発された転記方法を用いている。記号とその意味については、本稿の最後の部分の「付録」を参照のこと。）

(1) ([『赤毛のアン』という小説について 05:22-05:36])

全然しょっぱなです hh まだ(.)まだアンが(0.9)あの::(0.6)なんだっけマリ-マリナ;マリア?
っておばさんのとこに:ちょうどおうちに(.)来た(0.6)ところですまだはい

(I-JAS に収録されている日本語母語話者の発話データ。ID:JJJ14) ¹

この事例では、発話者が読書中の小説『赤毛のアン』が話題になり、現在小説のどこまで読んだかという会話相手の質問に答えている。発話者はまず「全然しょっぱなです」と言い、その後、具体的な内容（アンがマリアというおばさんのおうちに来たところです）を付け加えようとした時に、発話の産出がスムーズに行われなかった。網掛けの部分で示されているように、ここでは、わずか 14 秒の発話の中で、少なくとも以下の 7 種類の「乱れ」が観察される。それぞれは、次のようなものである。

- ①繰り返し：「まだ」と言った後に、少しポーズを置き、「まだ」と繰り返している。
- ②ポーズ（間、休止）：（ ）の中の「.」や「0.6」「0.9」などの数値で示されている部分。
- ③フィラー（つなぎ言葉）：「あの」というフィラーの使用。
- ④自問発話：他者指向の問いかけではなく、自分自身に向けて発した問いかけである「なんだっけ」。
- ⑤カットオフ（発話の中断）：「マリ-」と言いかけて中断した部分。
- ⑥言い換え：「おばさんのとこに:」と発話した後、「ちょうど」という副詞を挟み、「とこ」をもっと具体性を持つ表現「おうち」に置き換えている。
- ⑦音の延伸：「とこに:」の「に:」の部分で示されているような、母音を引き伸ばす現象。

¹ このデータは『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language : I-JAS)』に収録されている母語話者の対話タスクのデータである。([])の中の数値は、切り取った発話が録音データのどの部分に位置するかを示す。

これらの現象は、総じて、音声言語における「非流暢性 (disfluency)」 (伝・渡辺, 2009; Lickley, 2015; Jaspers, 2016; 定延, 2019 など) と呼ばれている。

じっくり時間をかけて、表現を練り、書いては消すなどの編集作業も可能な文字言語と違い、実時間に沿って産出していく音声言語は、「推敲や事前練習無しで発せられがち」 (定延, 2019 : 70) で、どのような順番で、どんな形で発話を組み立てるかは、ダイナミックなやり取りに応じて変化するものである。従って、上記例 (1) で挙げたような非流暢性現象は、音声言語においては決して珍しいものではなく、むしろ遍在している現象だと言える (Schegloff et al., 1977; 丸山, 2008; 定延, 2022 など)。だが、「理想的話者・聴者」に関心の大部分を置いてきた従来の言語学では、音声言語と文字言語を同一のものとして捉え、音声言語にのみ現れる諸事象から目を背けてきた。非流暢性現象もその中の一つである。伝統的な言語学の研究において、非流暢性現象は、ただ言語運用上のノイズとみなされ、研究対象として取り上げられてこなかった。また、そのような言語学の知見を土台とする第二言語教育の現場でも、非流暢性現象を排除すべき対象とみなし、言い淀みなく、流暢に話せるようになることを学習・教育の目標としてきた。

しかし、文字はことばを記録するために、誕生したものだと言われている。両者の発生の順序からもわかるように、人間の言語システムの根本的な拠り所は、文字言語ではなく、音声言語にあるということは言うまでもない。近年、言語学の研究において、言語システムの原点である音声言語に立ち返って、言語体系を見つめ直すべきという動きが広まりつつある (大野・中山, 2007; 串田ほか, 2007 など)。そうした動きの中、今まで等閑視されてきた非流暢性現象に光をあて、それが持つコミュニケーション機能を積極的に評価する研究が行われるようになった。また、第二言語教育の分野においても、非流暢性を会話教育に取り入れようとする試みが、すこしずつ進められるようになっていく。

本稿は、このような動向を念頭に置きつつ、非流暢性を日本語教育分野の会話教育においてどのように取り入れていくべきかを探求することを目的とする。そのために、音声言語における非流暢性に関する先行研究を吟味しつつ、「非流暢性」の定義を示す。そのうえで、非流暢性が会話という相互行為において持つコミュニケーション機能を分類し、整理する。これらを踏まえ、日本語の会話教育において、非流暢性を取り入れていく意義、また、取り入れていく際の留意点なども示したい。

2. 音声言語と非流暢性

2.1 非流暢性とは

1 章では、具体的な発話事例を示し、音声言語における非流暢性のパターンをいくつか列

挙げた。しかし、そもそも音声言語における非流暢性とはなにか。その定義について、いまだ定説がない。研究者の間でさまざまな論調が見られるが、その中の多くは、「非流暢」の正反対にある概念——「流暢」を規定した上で、「X ではない (流暢ではない)」という構文で、つまり、消極的な(negative)規定を行い、「非流暢性」を間接的に把握しようとしている。

例えば、Lickley (2015) は、流暢性という概念は多次的 (multidimensional) で、「計画的流暢性 (planning fluency)」「表層的流暢性 (surface fluency)」「知覚的流暢性 (perceived fluency)」の三つの側面から捉えられると指摘した上で、非流暢性とは「流暢性の崩れ (when fluency breaks down, fluency fails)」(Lickley, 2015: 451) であると述べている。また、日本語における非流暢性に焦点を当てた定延 (2022) は、Fillmore (1979) に基づき、「流暢」を「その場に合った内容を、首尾一貫した形で、その言語の統語法に沿って」滑らかに産出していくことと規定し、「そうでないもの」は「非流暢」に当たると論じている (定延, 2022: 78)。

上記の先行研究のように、「流暢性」を明確に規定した上で、それに対置される「非流暢性」を捉えるというやり方は、非流暢性を把握する有効な方法の一つに違いない。しかし、そもそも非流暢性とは、どのようなものなのかについての議論も必要ではないかと考えられる。本稿では、先行研究の知見を踏まえつつも、若干異なる角度、すなわち直接的(積極的)アプローチで、「非流暢性」とはなにかという問いを考えてみたい。

本稿では、Lerner (1996) の「発話の進行性 (progressivity of an utterance-in-progress)」という概念を援用し、進行性の滞りという視点から、非流暢性の定義づけを試みたい。

発話の進行性について、Lerner (1996) は次のように述べている。

[P]rogressivity can be thought of as constituted by the co-occurrence of two features of talk that concern the adjacent placement of words. First, after a turn at talk is launched, talk ought to continue - and show itself to be continuing beat by beat - at least until a recognizable TCU completion is reached (at which time the relevance of utterance progressivity can end). The adjacent placement of words both achieves the pace of the talk and, through the pace of the local preceding talk, provides a metric for what constitutes continued adjacency. Second, after a turn at talk is gained, each next word ought to be a successive word. That is, a turn's talk should show continued *syntactic* progress, word by word, toward a completion.

(Lerner, 1996: 257)

進行性とは、語と語の隣接的配置に関する二つの特徴の共起によって構成されると考え

られる。一つは、開始されたターンが、TCU²の完了可能点に到達するまで、一定のリズムを踏み、継続していくことである。語と語の隣接的配置は発話のリズムを形成するとともに、それまでの発話のリズムを基準に、継続発話のリズムが決められる。もう一つは、ターンが獲得された後、一つ一つの語が、適切な順序で並べられていかなければならないということである。すなわち、産出されていく語の一つ一つが統語的進行性を保ちつつ、完了可能点に向かっていくことである。日本語訳は筆者による。)

いささか長文の引用となったが、発話の進行性を理解する上で重要な論述だと思われる。ここでは、Lerner は時間軸に沿って継起していく発話を、語レベルに分解し、発話の進行性を語と語の連続的な「隣接的配置 (the adjacent placement)」として捉えており、また、その隣接的配置には、音声的連続性及び統語的一貫性という二つの側面が含まれていると指摘している。串田 (2002) は、この指摘を踏まえ、Lerner の論述を踏襲した形で、発話の進行性は「時間的進行性」と「統語的進行性」の 2 種類に大別されると述べている。

時間的進行性とは、発話が完了可能点に到達するまで、一定のリズムやペースで途切れることなく言葉を連ねていくことを意味する。事例 (1) で示されているような、ターンが構築されていく途中で、ポーズを入れたりした場合は、発話の一時的な途切れとなり、また、延伸という現象のように語末尾のモーラを引き伸ばしたりした場合は、リズムの乱れとなるため、両者とも時間的進行性の滞りになるわけである。

そして、二つ目の統語的進行性とは、産出されていく言葉の一つ一つが統語的な一貫性のもとに、配置されていきながら、完了可能点に向かっていくことである。例えば、事例 (1) の中で現れた自問発話の挿入、同じ言葉の繰り返し、言いかけた言葉を中断し、別の言葉に置き換えるなどのような現象では、発話の時間的進行性は損なわれていないが、統語的進行性の滞りとなる。

このように、本稿では、「進行性の滞り」という視点から、音声言語における非流暢性の定義づけを試みたい。ただ、先行研究で指摘されている「時間的進行性」「統語的進行性」の 2 種類のほか、「連鎖的進行性」という第 3 の範疇を設ける必要もあるのではないかと考える。

というのは、以上取り上げられた Lerner(1996)も串田 (2002) も単一の TCU の構築過程のみに注目したものである³。だが、会話教育を視野に入れた場合では、単一の TCU の構築だけではなく、それよりもっと大きい単位である会話というやりとりの構築をも射程に入れるべきではないかと考えるからである。従って、第二言語会話教育という枠の中で、非流暢性を検討する際、Lerner(1996)、串田 (2002) によって提起された発話の進行性とい

² ターン構成単位 (turn constructional unit : TCU) (Sacks et al., 1974)。一つの発話順番を構成しうる単位。文、節、句、単語などさまざまな形態がある。和訳文中の注釈は筆者による。

³ 両研究とも話し手と聞き手双方によるターンの共同構築という現象に注目し、話し手によるターン構築が行われている最中、発話の進行性の滞りは、聞き手が話し手のターン構築に関与するきっかけとなりうることを論じている。

う要素だけではなく、会話の進行性という要素も付け加えたい。

ここで言う「会話の進行性」は会話の連鎖的進行性を指す。すなわち、会話参与者によるターンの交替がスムーズに行われているということである。例えば、「質問—応答」「依頼—受諾/拒否」などのような隣接対 (Schegloff & Sacks, 1973)⁴において、第1成分 (first pair part: FPP) が産出された後、第2成分 (second pair part: SPP) が円滑に産出されている場合である。従って、質問に対して、応答の産出が遅延したような場合は、連鎖的進行性の滞りになる。事例 (2) はその一例である。

(2) [(施設訪問について)]

01 S : ちょっと伺いたいんですけど、<いまって>あの xxxx (施設名) ::で: こう

02 見学だったり体験みたいな::ことってお願いできるんでしょうか:.

03→ (0.6)

04→施2: え::今:ね:: あの::あの お休みしちゃってまし(.)て[::: (後略)

(平田, 2024: 309)

この事例は、平田 (2024) が挙げているものである。Sは訪問者で、施2は施設側の職員を表している。ここでは、Sの見学可否の質問 (01-02行目) に対して、施2は即答せず、発話の開始まで0.6秒 (03行目) の間合い、及び実質的な内容に言及する前に「え::」 (04行目) とフィラーの使用が観察される。つまり、「質問—応答」という連鎖的な進行性において遅延が生じたわけである。

以上述べてきたように、本稿では、先行研究を補う形で、「非流暢性＝進行性の滞り」と、直接的なアプローチで定義する。その際、進行性という用語に関しては、発話の進行性と関連する「時間的進行性」「統語的進行性」のほか、会話の進行性を意味する「連鎖的進行性」の三つの側面を有していると捉える。そのいずれかにおいて進行性の滞りが生じた場合、非流暢だと言えると理解したい。

2.2 コミュニケーション機能を有する非流暢性

語学の教科書におけるモデル会話を覗いてみると、一直線で、発話の進行性、会話の進行性が非常にきれいに保たれており、言い淀みなど一切なく、またターン交替もスムーズに行われる会話文がその大多数を占めていることがわかる。また、伝・渡辺 (2009) によると、音声言語における非流暢性に関する初期的な研究のほとんどは、「吃音や失語症など

⁴ 隣接対 (adjacency pair) : ある発話が特定の種類の発話を要求し、先行発話と後続発話がセットとなるもの。例えば、「挨拶—挨拶」「質問—応答」などがその類である。そして、隣接対の中、先行発話は「第1成分 (first pair part: FPP)」、後続発話は「第2成分 (second pair part: SPP)」と呼ばれている。

の障害や幼児の言語発達との関連を論じるもの」である（伝・渡辺, 2009: 53）。これらの事実から、非流暢であることは、言語能力や言語習熟度の不完全さと直結するものであり、改善すべき対象として扱われてきたことがうかがえよう。

しかし、近年では、言語学や会話分析などの諸分野において、音声言語に関する研究の蓄積が進むにつれ、徐々に明らかになってきているのは、これまでコミュニケーションを妨げる要因として見られてきた非流暢性現象は、文脈によっては、コミュニケーションを阻害するどころか、重要なコミュニケーション機能を有するものも少なくないということである。この節では、会話という相互行為において、非流暢性が持つコミュニケーション機能を①感情・態度の表出、②ポライトネス・ストラテジー、③修復ストラテジーの三面から見てみよう。

①に関しては、Kurzon (1997)、定延 (2005)、定延・中川 (2005) などの研究がある。

語用論、社会言語学など多角度から沈黙 (silence) を分析した Kurzon (1997) は、沈黙は少なくとも、「I cannot speak (話すことができない)」「I will/ shall not speak (話すつもりはない)」「I must/ may not speak (話してはいけない)」の三つの解釈の可能性があるとして述べている (Kurzon, 1997: 44)。そして、診療、授業、法廷などの制度的場面 (institutional settings) の談話における沈黙の事例を取り上げ、沈黙はただ言葉不在の無音状態ではなく、文脈によっては話し手の心理や感情を反映することもあると論じている。

また、定延 (2005)、定延・中川 (2005) は、日本語の日常会話において、単語の発出が滑らかに行われず、単語内部でのつかえが生じるという非流暢性現象に光を当て、「途切れ型・語頭戻り方式」⁵のつかえは驚きという感情の表出に寄与すると指摘している。

②ポライトネス・ストラテジーとして機能する非流暢性についてだが、依頼や断りなど相手のフェイス (体面、面目) を侵害しかねない行為を実行する場合は、そうでない場合と比べて、発話が非流暢になる傾向があるということはすでに多くの先行研究で指摘されている (Pomerantz, 1984; Sacks, 1987; Schegloff, 2010 など)。

例えば、相手の誘いを断る際、即座に「すみませんが、今日は先約がありまして」と、発話・会話の進行性をきれいに保ち、流暢に断るより、「あのう...すみませんが...今日は...」などと口ごもって、わざと発話の進行を滞らせ、非流暢性要素を帯びさせるのが普通であろう。相手のフェイスの侵害になりかねない場面において、そのような非流暢性が多く生じるという事実は、このような場面において、流暢な発話より、非流暢な発話のほうがポ

⁵ 定延 (2005)、定延・中川 (2005) では、つかえが生じた際、どんな形でつかえたか (発音を途切れさせる形か? それとも、音を延伸させる形か?)、また、つかえた後、どのような発音行動が行われたか (単語の残りの部分をそのまま続けて発音したか? それとも、単語の最初の部分に戻って言い直したか) に注目して、語中でのつかえという現象を次の 4 パターンに分けている。それぞれは、①「途切れ型・語頭戻り方式」 (例: カ、カリフォルニアですか) ②「途切れ型・続行方式」 (例: カ、リフォルニアですか) ③「延伸型・語頭戻り方式」 (例: カーカリフォルニアですか) ④「延伸型・続行方式」 (例: カーリフォルニアですか) である。

ライトネスにかなっているということを物語っていると言えよう。つまり、非流暢性は、フェイス侵害行為を緩和させる要素として機能していると考えられる。

そして、③に関しては、非流暢性現象のうち、もっとも研究の蓄積がなされているフィラーについて、それは単なる発話上の乱れやエラーではなく、発話産出上のトラブルに対処する、いわゆる修復ストラテジーとして機能する側面があるということが、たびたび指摘されている。

例えば、Clark(1994)では、発話産出上何らかのトラブルを抱えているときに発するフィラー「uh」、「um」は、単なる発話上の乱れではなく、また無秩序でランダムに出現する現象でもないと述べられている。Clarkによると、フィラー「uh」、「um」は、発話の中断や遅延の長さがある程度聞き手に予告する機能を持っている。そして、実験検証の結果、「uh」と比べて、「um」は、より長い中断や遅延を予告するということも明らかになっている。

また、日本語のフィラーに注目した Kushida & Hayashi (2022) は、言葉探しというプラクティスにおけるフィラー「こう」の使用は、話し手による言葉探しという修復作業の開始や継続を示すだけでなく、検索中のアイテムが行為や状況を描写する表現であることも投射していると論じている。

このように、非流暢性現象は、単なる発話のエラーや言語運用上の不要なノイズではなく、場合によっては、会話という相互行為において、コミュニケーション・ストラテジーとして重要な機能を果たすこともあるということが、徐々に解明されてきている。

3. 第二言語教育と非流暢性

3.1 第二言語教育に非流暢性導入の必要性を訴える声

以上見てきたように、言語学などの研究においては、非流暢性現象は、少しずつではあるが、スポットライトが当てられ、母語話者であっても、実際の言語使用において流暢に話しているわけではないこと、また、非流暢性にはさまざまなコミュニケーション機能があることなどについての認識が少しずつ市民権を獲得しつつある。それに伴い、第二言語教育の分野においても、音声言語をベースとする会話教育で、非流暢性を積極的に取り入れるべきだと主張する声が広まりつつある。

Lickley (2015) は、英語母語話者の自発音声における非流暢性現象を網羅的に整理した上で、「学習者が母語話者と同等のレベルに達するために、学習者が、言語運用上の非流暢性に関しても、母語話者と同様の水準に達することを望むのはもっともである」と述べている。つまり、第二言語教育において、学習者が一定の非流暢性を身につけられるように、非流暢性を教授内容に組み込むことの必要性を指摘していると解釈できる。

また、日本語教育に関して、定延（2019, 2022, 2024）は「非流暢で自然な日本語の教育構想」を提案している。

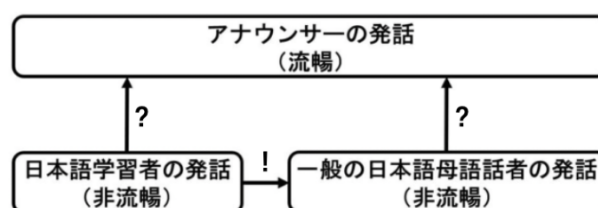


図1：「非流暢で自然な日本語」の教育構想（定延, 2024:15）

従来の日本語教育では、原稿を読み上げるアナウンサーのように流暢に話すことを、学習・教育の目標としてきた。しかし、図中の「？」で示されているように、これは、学習者だけではなく、母語話者にとってさえ困難なことである。したがって、定延は、上記図1の「！」で示しているように従来の流暢性の規範からすれば奇妙なことのようと思われるかもしれないが、会話教育において、学習者に目指させるべき理想は、原稿を読み上げるアナウンサーのような流暢な発話ではなく、非流暢でありながら自然な日本語であると考えべきだと主張している。

そして、ごく最近では、具体的な非流暢性現象、または非流暢性現象が現れる特定の場面に焦点をあて、日本語教育に非流暢性を取り入れようとする試みも散見される（船橋, 2022, 2024；須藤ほか, 2023；佐藤, 2025 など）。

例えば、船橋（2022, 2024）は、接続詞「で」とフィラーの共起使用を観察し、フィラーの指導において、「で」とフィラーのチャンク（語のまとまり）という単位での提示が有効ではないかと述べている⁶。また、口頭発表における母語話者と学習者のフィラーの使用を分析し、フィラーを「あるとより自然」（船橋, 2024: 302）というもののよりは、文型などの学習項目と同列のものとして扱い、積極的に口頭発表指導に取り入れるべきだと論じている。

須藤ほか（2023）は非流暢性教育を現場で試験的に実践したものである。母語話者の非流暢性を実感させるため、同じ発話内容の2種類（流暢な発話と、フィラー・延伸などが含まれる非流暢な発話）の書き起こしを、学習者に読み上げさせ、またその音声を録音した。学習者による非流暢な発話の読み上げ音声を分析した結果、非流暢性の取り入れ（非流暢な要素を適切な韻律で発することが前提条件ではあるが）は「対話性」の向上につながると指摘している。

そのほか、学習者の視点から、母語話者の非流暢性のうち、学習者が自ら習得したいと望

⁶ 「金縛りにあって一、で、あのー、金縛り遭うと、こ、動けないんですけども」（例文は船橋（2022:123）による）のような、接続詞「で」とフィラーの共起使用を指す。

んでいる項目を明らかにしようとする研究もある（佐藤, 2025）。

このように、近年では、従来の流暢性を規範とする会話教育に異議を唱え、非流暢性教育の必要性及び可能性を提示する研究が少しずつ行われるようになり、また、非流暢性を教育現場に取り入れる実践の試みもわずかながらだが、なされるようになってきた。

3.2 非流暢性導入の留意点

非流暢性は、音声言語において不可避な現象であり、かつ、コミュニケーション機能を有するものである以上、音声言語を教授内容とする第二言語の会話教育にそれを積極的に取り入れるべきだという主張はもっともであろう。しかし、佐藤（2025）が指摘しているように、非流暢性に関して言語学などの分野で明らかになった諸事象は、「日本語教育現場で取り上げる項目を考える際のベースにはなるが、」「非流暢性のうちどの項目を扱うべきかについてはさらなる議論が必要となる。」つまり、実際の教育項目に落とし込む際、具体的な形態も機能も様々な非流暢性のうち、指導項目として、「なに」をピックアップすればいいかという問題である。この「なに」問題に加えて、ピックアップされた非流暢性を現場では具体的に「どう」扱えばいいかという「どう」の問題についての検討も必要ではないかと考える。

まず、「なに」問題についてだが、定延（2005）は、非流暢性現象の一つであるフィラーについて、興味深い現象を指摘している。子供はほかの言葉を間違えて使ったりすることはよくあるが、フィラーの使用は間違えたりはしないということである（定延, 2005: 8）。確かに、「ここは『あのう』ではなく、『ええと』を使いなさい」と眉を顰め、子供のフィラーを訂正したりする大人を見かけたことはない。また、小中高の国語教育においても、フィラーを学習項目として取り上げることもない。つまり、母語話者にとって、フィラーは学習を通して身につけたものではなく、完全に自然習得したものだということである。これは音声言語における非流暢性全般に当てはまると言えるであろう。

同じ原理は第二言語の学習でも通用すると考えられるのではないだろうか。つまり、コミュニケーション機能を有する非流暢性は、母語話者にとっては認知の発達とともに自然習得したものであるように、学習者も、しっかり語彙や文法、文型などの第二言語知識を積み重ねれば、意識的な学習を経ずとも、無意識のうちに自然に身につけられると捉えることもできるかもしれない。特に、つかえやカットオフなどのようなプロソディックな（韻律的な）ものは、言語の垣根を超え、さまざまな言語において共通する非流暢性現象であるため、学習者の母語の正の転移が期待できるとも考えやすい。それに対し、フィラーや自問発話など、リングィスティックな（言語的な）もの、つまり、言語の種類によって違う形態をなすものは、意識的な学習が求められるであろう。

従って、「なに」問題を検討する際、「母語話者の母語使用にこのような非流暢性が

観察されている」だけではなく、「目標言語知識をある程度蓄積している学習者でもうまく使用できていない」という点も考慮に入れるべきではないかと考える。そして、中間言語⁷しか持っていない学習者は、会話という相互行為において、母語話者よりも頻繁に発話の産出・聞き取り・理解にまつわるトラブルに直面する。そのため、それらのトラブルに対処し、会話を維持したり、継続させたりするのに役立つ修復ストラテジーとして機能する非流暢性は、教育現場に優先的に導入すべきではないかとも考えられる。

次に、「どう」問題についてであるが、事例(1)(2)で示されているような形で、非流暢性を文字に反映させ、提示するのは、かえって学習者に認知負荷を強いることになるかもしれない。非流暢性は音声言語に特有のものである以上、教育現場でそれを取り扱う際、今までのように紙媒体の教科書を主に用いるのではなく、音声媒体、つまり、学習者の耳に直接訴えるほうが効果的ではないかと考えられる。また、語彙や文型などのように意図的に練習させることも難しいと思われるため、学習者の気づきを促す形で⁸、取り入れるべきではないかと考える。

たとえば、次のような仕方である。話の流れや内容など全く同じ会話を、流暢バージョン(言い淀みが一切ないもの)と非流暢バージョン(非流暢性が現れているもの)の二つのバージョンを学習者に聞かせ、両者の比較により、学習者の注意を非流暢性の形態や具体的な使用に向けさせる。また、さまざまな非流暢性を含んだ豊富な音声リソースを提供し、学習者が自分自身でそれを手がかりに、非流暢で自然な日本語の規則性に気づくことができる環境を整える。以上のような工夫が求められるのではないかとと思われる。

4. おわりに

本稿では、まず音声言語における非流暢性の再定義を試みた。従来の「非流暢＝流暢ではない」という間接的アプローチと異なり、本稿では、「非流暢＝発話・会話の進行性の滞り」だと捉え、先行研究を補完しつつ、直接アプローチを用いて非流暢性を規定し直している。また、非流暢性が会話という相互行為において果たすコミュニケーション機能を「感情・態度の表出」「ポライトネス・ストラテジー」「修復ストラテジー」の三つに分けて、それぞれ概観し、日本語教育に非流暢性を導入する必要性及び留意点を検討した。

非流暢性教育を検討する際、さまざまな形態や機能を有する非流暢性のうち、つかえやカットオフなど通言語的で、韻律的な(prosodic)ものは、学習者の母語の正の転移が期待できる部分が大きいため、優先順位が低いと言えよう。それに対して、個別言語的で、言語

⁷ 中間言語(interlanguage)とは、外国語学習者が学習の途中で使用する、母語と目標言語の要素を併せ持った独自の言語体系である(Selinker, 1972)。つまり、外国語を学ぶ過程で学習者の中に形成される「母語でも目標言語でもない」、発展途上の中間的な言語体系を指す。

⁸ この点は、ある研究会における舩橋瑞貴先生(早稲田大学)との会話から大きな示唆を受けた。

的な (linguistic) もの、かつ修復ストラテジーとして機能するものは優先的に扱うべきだと考えられる。また、母語話者の非流暢性の習得過程を鑑みると、学習者が自力で自然習得できるものと、一定の目標言語知識を積み上げても習得が難しいものとを峻別する必要性もあると思われる。そして、非流暢性教育を実際の現場に取り入れる際、学習者に気づきを与える形で、直接学習者の耳に訴えるほうが効果的ではないかと考えられる。

教育現場に非流暢性を導入するに際して立ちはだかる「なに」と「どう」の問題について、本稿ではまだ仮説提起の段階に留まっているが、それらの仮説の検証を今後の課題としたい。

付録 (データの書き起こしに用いた記号とその意味)

(数字)	音がない間の秒数。
(.)(.)(.)	ごく短い間が生じている。
-	直前の発話が中断されている。
h	笑い。数が多いほど長い。
?	語尾の音が上昇している。
ゝ	語尾の音がやや上昇している。
:	直前の音が延びている。
[	発話の重なりの開始。
< >	前後に比べ、ゆっくりと発話されている。
→	注目する行。

参考文献

- 大野剛, 中山俊秀 (2017) 「文法システム再考—話しことばに基づく文法研究に向けて—」 鈴木亮子, 秦かおり, 横森大輔 (編) 『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』 ひつじ書房, 5-34.
- 串田秀也 (2002) 「統語的単位の開放性と参与の組織化 (1) —引き取りのシークエンス環境—」 『大阪教育大学紀要』 50(2), 37-46.
- 串田秀也, 定延利之, 伝康晴 (2007) 『時間の中の文と発話』 ひつじ書房
- 定延利之 (2005) 『ささやく恋人、りきむレポーター：口の中の文化』 岩波書店
- 定延利之 (2019) 『文節の文法』 大修館書店
- 定延利之 (2022) 「非流暢で自然な日本語：記述言語学の観点から」 鎌田修, 由井紀久子, 池田隆介 (編) 『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』 ひつじ書房, 77-88.
- 定延利之 (2024) 「発話の (非) 流暢性への総合的なアプローチ」 定延利之, 丸山岳彦, 遠藤智子, 船橋瑞貴, 林良子, モクタリ明子 (編) 『流暢性と非流暢性』 ひつじ書房, 3-23.
- 定延利之, 中川明子 (2005) 「非流ちょう性への言語学的アプローチ—発音の延伸、とぎれを中心に—」 串田秀也, 定延利之, 伝康晴 (編) 『文と発話 1 : 活動としての文と発話』 ひつじ書房, 209-228.
- 佐藤淳子 (2025) 「学習者が日本語母語話者の非流暢性に見る「母語話者らしさ」とその運用意向」 『日本語・国際教育研究紀要』 28, 38-55.
- 須藤潤, 定延利之, 船橋瑞貴 (2023) 「日本語学習者のオンライン発話における「対話性」向上と非流暢性—読み上げ音声による予備的考察—」 『ヨーロッパ日本語教育』 26, 269-281.

- 伝康晴, 渡辺美知子 (2009) 「音声コミュニケーションにおける非流暢性の機能」『音声研究』13(1), 53-64.
- 平田未季 (2024) 「非流暢な母語話者と割り込めない学習者—電話会話における期待に沿えない回答への学習者の対応—」定延利之, 丸山岳彦, 遠藤智子, 船橋瑞貴, 林良子, モクタリ明子 (編) 『流暢性と非流暢性』ひつじ書房, 305-327.
- 船橋瑞貴 (2022) 「非流暢で自然な日本語：日本語教育の観点から」鎌田修, 由井紀久子, 池田隆介 (編) 『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』ひつじ書房, 123-135.
- 船橋瑞貴 (2024) 「口頭発表におけるフィラー—口頭発表指導への応用を視野に入れて—」定延利之, 丸山岳彦, 遠藤智子, 船橋瑞貴, 林良子, モクタリ明子 (編) 『流暢性と非流暢性』ひつじ書房, 289-304.
- 丸山岳彦 (2008) 「『日本語話し言葉コーパス』に基づく言い直し表現の機能的分析」『日本語文法』8(2), 121-139.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Clark, H. (1994). Managing problems in speaking. *Speech Communication*, 15, 243-250.
- Fillmore, C. (1979). On Fluency. In C. Fillmore, D. Kempler, & W. Wang (Eds.), *Individual Differences in Language Ability and Language Behavior* (pp. 85-101). Academic Press.
- Jaspers, J. (2016). (Dis)fluency. *Annual Review of Anthropology*, 45, 147-162.
- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In G. Lerner (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation* (pp. 13-31). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Kurzon D. (1997). *Discourse of Silence*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Kushida, S. & Hayashi, M. (2022). Indicating difficulty in describing something in words: The use of *koo* in word searches in Japanese talk-in-interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 55(1), 59-78.
- Lerner, G. (1996). On the “semi-permeable” character of grammatical units in conversation: Conditional entry into the turn space of another speaker. In E. Ochs, E. Schegloff & S. Thompson (Eds.), *Interaction and Grammar* (pp.238-276). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lickley, R. (2015). Fluency and disfluency. In M. Redford (Ed.), *The Handbook of Speech Production* (pp.445-474). Wiley-Blackwell.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structure of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (pp. 57-101). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1987). On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation. In G. Button & J. Lee (Eds.), *Talk and Social Organization* (pp. 54-69). Clevedon/ Philadelphia: Multilingual Matters.
- Sacks, H., Schegloff, E. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- Schegloff, E. (2010). Some other “uh(m)”s. *Discourse Process*, 47(2), 130-174.
- Schegloff, E. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327.
- Schegloff, E., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in organization of repair in conversation. *Language*, 53, 361-382.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-231.

Second Language Education and Disfluency: Implications for Japanese Conversation Teaching

GUO JI

The aim of this paper is to explore how disfluency should be incorporated into Japanese conversation education. Although previous studies have often taken a negative approach by defining disfluency as simply “not fluent,” this paper attempts a more positive definition: disfluency as “a disruption in the progressivity of utterance or conversation.” Based on this definition, the communicative functions of disfluency in interaction are broadly categorized into three types: (1) expression of emotions and attitudes, (2) politeness strategies, and (3) repair strategies. Each category is then reviewed. Building on these discussions, the paper examines both the necessity of incorporating disfluency into second language education—particularly within the context of Japanese conversation instruction—and the points that require attention in doing so. Among the various types and functions of disfluency, the paper argues that features that are language-specific and linguistic (rather than cross-linguistic or prosodic), and that function as repair strategies, should be prioritized. Furthermore, it proposes that when introducing such features, audio-based educational materials that directly appeal to learners’ ears are likely to be more effective than printed materials.

Keywords: disfluency, disruption of progressivity, communicative function, Japanese conversation education

[Second Language Education and Disfluency: Implications for Japanese Conversation Teaching]

[GUO, Ji (中国) 贛南師範大学外国語学院専任講師・九州大学大学院博士後期課程・日本語教育専攻]